

---

# そして僕は二度死んだ

白山菊理

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そして僕は二度死んだ

### 【Nコード】

N6276E

### 【作者名】

白山菊理

### 【あらすじ】

夏のある晩、僕は腹を刺された。生死の狭間で会った黒ずくめの男。これから僕は何をすべきなのか。どこに向えばいいのか。『夏ホラー2008百物語編』参加作品です。

く罪く

朝起きると、僕は血だらけでリビングに居た。

手には包丁を握り、ピクリとも動かない。

母さんが大声で泣いている。声を聞きつけて父さんも起きてきた。

弟は…弟は…ああ、あいつは何であんな顔をしているんだ？

「おや、やつとお目覚めですか？」

僕のすぐ後ろで誰かの声がした。

恐る恐る振り返るとそこには全身黒ずくめの男が立っていた。

マジシャンのような黒いシルクハット、そして黒いマントに身を包んでいる。顔は良く見えない。

「おっと失礼。‘やつと’という表現は正しくありませんでしたね。こんなに目覚めが早いとは驚きですよ。」

「アンタは誰なんだ？」

「紹介遅れました。私はこの世とあの世を繋ぐ役割を持つものです。そうですね、貴方方の知っている言葉で言つと‘死神’といったところですかねえ。」

死神だと？

僕は死んだのか？

「ええ死んでいますとも。」

僕の思考を読み取り、黒ずくめの男はそう告げた。

「しかし、死にきつていないようですね。」

「死にきつて…いない？」

「はい。完全に死んだ魂というのは貴方のように自我を持つたりはしませんからね。いいですか？死んだ魂というものは無垢なのです。この世の全ての柵しかいみから解放され、一番美しい状態ともいえましょう。貴方のように生前の形をもったり喋ったりは決してしない。彼らは白い光の玉となり漂うのです。それを回収し、あるべき場所へと持つていくのが私の役目なのですが……貴方はまだ私の手には掛からないようですね。」

死んでいないのに死人、死人なのに死んでいない。

わけが分からない。一体この男は何を言っているのだろう。

ただ一つだけ分かるのは、この男の話によると僕は中途半端な存在だということだ。

「そうです。貴方は中途半端な存在といえましょう。よく怪談話などで語られる幽霊などと貴方はまったく同じなのです。この世に未練がある魂は貴方のような状態で現れる。死して尚も彷徨う、今の貴方のように中途半端なのです。しかし、貴方がその姿という事はどうです？何かこの世に未練でも？」

未練、それは沢山ある。育ててくれた母さんと父さんに感謝も出来ず、友達とちゃんとした別れをしないままあの世に行くなんてんでもない。

けど、この男が言っている意味は何か違う気がする。

幽霊と同じ？やつらはこの世に未練を持っている。でもそれはきつと僕の考えているようなものとは違う理由でだ。

きつとそれは深い悲しみ。言い表すことの出来ない怒り。何故悲しむのか？何故怒るのか？

答えは簡単だ。誰かを怨んでいるからだ。

そう誰かを　　！！

「ほう、思い出したようですネ。では、貴方をこの世へとお返しいたしましょう。どうぞ、再び私に会う日まで、貴方の思い通りの悔いのない人生をお過ごしくださいませ。」

顔の见えない男が、ニヤリと笑った気がした。

\*

「…ち、…いち…昇竜、気が付いたのね！！」

目を開けると一番最初に入ったものは泣きじゃくりながらこちらを見ている母さんの顔だった。

あの日から何日が経ったのか僕には分からない。

けど母さんが長い事僕に付き添っていてくれた事だけは隣にある簡易ベットやその脇に置いてある必要最低限の生活用品で分かった。

「ごめん…母さん、俺……」

「いいのよ。いいの。でも、謝るくらいならどうして自殺なんかしようとしたの！？」

自殺　？

一体誰がそんなことをするというのか。

僕は絶対自殺なんてしない。するものか。それに僕は自殺で死んだわけじゃない。

そうアイツが、アイツがやったんだ！

「母さん、僕は　」

「昇竜、目が覚めたか！良かった、皆心配してたんだぞ。」

自殺なんかじゃない。そう伝えようとした丁度その時、病室のドアが開き、父さんが入ってきた。  
心配そうな顔をしていたけれど、僕が目を覚ましたことを知り少しだけ安堵していたようだ。

「ああ良かった。目が覚めてくれて。母さんも私も心配してたんだよ。もちろん誠司<sup>せいじ</sup>も。ほら、誠司。お兄ちゃんの目が覚めたよ。こっちにきなさい。」

父さんの背中に隠れていた弟の誠司がそこからひょっこりと顔を覗かせた。

弟の顔を見た瞬間、僕は吐き気と眩暈に襲われた。

そうだ、僕は弟に！！

「ちょっと、昇竜！大丈夫？昇竜！！」

嗚呼、吐き気が止まらない。

視界はぐるぐると回り、父さんの顔も母さんの顔も良く見えない。

そんな中、弟の誠司の顔だけがはっきりと見えた。

焦るわけでもなく、誠司は僕の顔をしげしげと覗き込み、そして笑

った。

\*

夢を見ている。

そう自覚しながら見る夢は何だか不思議な感じがした。泣いている男の子が見える。これは小さい頃の僕だ。

お父さんが交通事故で亡くなって、あの頃は「死」というものが良く理解できなくて、でもお父さんが居なくなってしまったんだということは理解できた。

涙が止まらなくて、母の腕の中で泣き続けた。

母さんだつて辛かっただろうし、思い切り泣きたかつただろう。だけど母さんは僕を安心させる為に微笑んで慰めてくれた。母さんにはこれから先悲しい思いをして欲しくない。僕が傍で支えてあげるんだと僕はその時心に誓った。

そして僕は冷たくなってしまった父さんに誓ったんだ。「母さんは僕が守るよ。だからお父さんは安心して」と。

これは夢というより昔の記憶だった。

この時、そう誓った僕が自殺なんかするはずがないのだ。そう自殺なんか絶対にしない。

全部、全部アイツのせいなんだ  
！

\*

「うわあああ！」

病室中に響き渡る自分の声で目が覚めた。

「どうしたの、急に大声を上げて。怖い夢でも見たの？」

隣で僕の看病をしていた母は驚いた様子でこちらを見た。

「ずっと魘されていたみたいだけど、大丈夫？」

僕は全身にびっしょりと脂汗を掻いていた。母さんはずっと僕が寝ている間額に掻いた汗を拭いていてくれたらしい。手に持っていたタオルは濡れて、重くなっていた。

「うん。大丈夫だよ。それよりさ、母さん。ずっと僕につきつきりだったみたいだし疲れたでしょ？今日は帰って休みなよ。」

「でも…」

「いいよ、大丈夫だって。」

母さんは渋々病室を後にした。

母さんは僕の具合が心配だからというのも理由だろうが、また僕が「自殺」をしないか不安だったようだ。

僕は自殺なんてしないのに。変な疑いをもたれて凄く不愉快な気分だ。

僕自身も母さんに休んで欲しいという気持ちもあったが、疑われているのを何となく察し一人になりたかったというのが母さんを帰した理由だった。

それに一人になって頭の中を整理したかった。



僕の本当の父さんは10年前、僕が7歳の時に交通事故で亡くなった。だから今の父さんは義父ということになる。弟も義弟だ。母は僕が15歳のときに今の父さんと職場で知り合い、再婚した。僕は別に反対はしなかった。母さんが幸せならそれで良いと思ったし、今の父さんも僕の本当の父さんくらい家族思いで良い人なのだ。反対する要素などどこにもなかった。

それにあの頃は僕に弟が出来るという事で少し嬉しかったのだ。弟の誠司の母親という人は、酷い人だったらしい。子供の面倒も見ず、色々な男と遊び歩き、酒に溺れ、誠司に暴力を振るっていた。何故、人の良い義父がそんな人と結婚してしまったかは分からない。多分、お人好しで結婚の話を通れなかったのだろう。誠司の母の両親は縁談を無理矢理まとめ、娘である人を父に押し付けたらしい。話を聞く限り、両親でも手に負えない人だったということが分かる。そんな母の元で育ったせいなのか誠司は言葉が喋れなくなってしまった。3歳くらいまではちゃんと言葉を話していたらしい。しかし、母親の暴力が始まってから「ごめんなさい」しか言えなくなり、とうとう何も喋れなくなった。そして今も言葉を喋れない。息子がこんな状態になってしまい、離婚を決意したのが僕の母と知り合う3年前だそう。

それ以来、誠司は母親と会っていない。父も会わせない様にしているが、そんな母親のことだ。会いに来るはずもない。その方が父にとっても誠司にとっても良いのだろうか。

そんなわけで、とにかく誠司は言葉が喋れない。けど、あの日確かに誠司は言葉を発したのだ。

あの日、とても蒸暑くて僕は中々眠りにつけなかった。眠くても眠れない気持ち悪さ。寝返りをうつ度に汗をかいていく。

僕は水を飲もうと1階の台所へと向った。

台所は人が居ないせいか、僕の部屋より少し涼しかった。どうせな

ら生温い水道水より冷たく冷えた麦茶が飲みたいと冷蔵庫を開けたその時、後ろに誰か立っている気配がして僕は振り返った。そこにいたのは弟の誠司だった。

僕は誠司も僕と同じように水を飲みに来たのかと思い、誠司に声をかけた。

「誠司も水飲みに来たのか？」

「……」

当然無言。しかしコクンと頷いた。

僕は誠司に背を向け、手探りで誠司のコップを探し、麦茶を注いでいると誰かの声がした。

「お兄ちゃん、死んじゃうの？」

誰か、其処にいる誠司の声だった。僕はこの時初めて誠司の声を聞いたので背を向けた状態では誰の声だか一瞬分からなかったのだ。

「お前、声が……」

「お兄ちゃん、死んじゃうの？」

僕の言葉は意に介さずという感じで弟はさらに言葉を続ける。

「お兄ちゃん、死んじゃうの？」

次の瞬間、何かお腹に鋭いものが刺さり、僕は気を失ったのだ。目が覚めたとき、僕は血だらけの僕自身を見下ろしていた。そしてあの黒ずくめの男と会ったのだ。

嗚呼、僕はあの時一度死んだんだ。でもあの男が言うように未練があつて戻ってきた。

なら僕はどうしたらいい？これから何をすればいい？

復讐？一体誰に？

そんなの、決まってるじゃないか！！

この手で、奴を……！

どんな扱いをされてもいい。どうせ僕は一度死んだのだ。

それに奴も僕を\*した。それなら蘇った僕に\*されても当然じゃないか。

『貴方の思い通りの悔いのない人生をお過ごしくださいませ。』

男の言つた言葉を思い出す。

男の言つた言葉の意味は僕の思っていることと同じ事を言っていたのだ。

死神さえ僕にそうしろと言つたのだ。これはもうやるしかない。

何日かして僕は退院した。

父が運転する車で家に帰る。

「具合はどうだ、もう大丈夫か？」

父は僕の体を気遣つてくれた。義父でありながら僕を自分の本当の息子のように可愛がつてくれる。それがとても嬉しかった。

でも、今までは「嬉しい」と感じるだけで終わっていただろうが、今はそうではない。

父に優しくされるたびに罪悪感がつのる。

僕は父の本当の息子である弟を\*そうとしているのだ。

ごめんなさい、もう決めたことだから後には戻れないんだ。

これだけが心残り。大好きな義父に恩を仇で返すような形になることが弟を\*すということより罪悪感を感じること。

家に着くと、母さんがお昼の支度をして待っていた。

「退院おめでとう、今日は貴方の好きなハンバーグよ。」

そう言いながらハンバーグをこねている。

その隣では弟が母と同じ様に。

「誠司……」

僕は無意識に弟の名前を口に出していた。あの憎き弟の名を。

弟は僕が名前を口にしたのを気付かないようで、ひたすらハンバーグ作りに没頭している。

代わりに母が答えた。

「誠司ったらお兄ちゃんが帰ってくるって言ったらハンバーグ作るの手伝い始めてね、きつとお兄ちゃんが退院してくれて嬉しいのよ。だからお祝いに自分の作ったハンバーグを食べて欲しいって…そうよね、誠司？」

「うん」という代わりに誠司は笑顔でコクンと頷いた。  
そしてハンバーグ作りに戻る。

くちやくちや、ぐちやぐちや

ぐちゃ、ぐちゃ、ぐちゃ、ぐちゃ

肉をこねる誠司の顔は嬉しそうだった。

僕のため？いや、それは違う。あいつはどこかおかしい。

肉をこねるといふ行為に恍惚とし、その目は爛々と輝いている。

ぐちゃ、ぐちゃ

肉をこねるたび狂気を帯びたような笑顔。

何故母も父も疑問に思わないのだろうか。

僕の視線に気付いたのか弟はこちらを向いてにやりと笑った。

それを見た瞬間、僕は酷い吐き気に襲われた。

「うつ…」

苦しい。お腹の傷が疼く。

痛い、痛い、痛い！！

我慢できない激痛に思わずその場にうずくまる。

「おい、昇竜！大丈夫か！？」

父さんは慌てて僕に駆け寄る。

僕なんかよりあいつを！早くあいつを！

そう思っても声に出せないし、気付かない。

だから僕はこの場を離れるしかなかった。具合がよくない、食欲がないといい自分の部屋に行く。

これで弟の顔を見なくて済むのだ。昼食はとれないがこれで良い。得体の知れない弟が作った昼飯など手を付けたくなんかない。

何も考えたくなかった。

このままではもう一度あいつに殺されるのではないかという恐怖が押し寄せてくる。

寝てしまおうと目を閉じればあの光景が浮かんでくる。喋れないはずの弟が口を開き僕を追い詰め僕を殺した。

だから僕は何をどうすればいい？決まっている。それを決意してこの世に戻ってきたんだから。

早く、早く、一刻も早く先手を打たなければ！

「そうだ、今夜にでも」

自分のものではないかのように口からぼろりと零れた言葉。

込み上げてくる興奮。

恐怖など訪れるものか！お前が与える恐怖より、僕が先にお前に恐怖を与えてやるんだから！

結局僕は部屋から一步も出ず、夕食もとらなかった。

この喜々とした表情を家族に見られ、不審に思われては困るからだ。

そして、皆が寝静まった深夜、僕は計画を実行する。

あの日と同じように部屋から出て台所へ。

多分あいつは、僕の気配に気付いて僕に止めを刺しにやってくるに違いない。

はたして、弟は僕の思惑通りに来た。

あの日と同じように僕の後ろに無言で立っている。

だから僕もあの日と同じような行動を取る。

「誠司も水飲みに来たのか？」

無言のままコクンと頷く弟。ああ、その行動もこちらは予測済みさ。誠司のコップに麦茶を注いでいると誠司が口を開いた。

「お兄ちゃん…」

あの時と同じ。喋るはずのない弟が喋った。振り向くと誠司は後ろでに何かを持っている。それをゆっくりと僕のほうへ向けて

「うわあああああ！」

このままではやられる！  
考えと同時に体が動いていた。手元にあった包丁を持ち弟へと突進する。

グサッ！！

鈍い音と共に生温かい鮮血が僕の手を伝い床へと落ちる。そして弟もその場に崩れ落ちた。

はは、僕は遂に復讐を成し遂げたんだ！こんな簡単に！！

その時、誠司の右手が動き握っていたものを僕に向けた。

「  
」

声にならない声。

何故か涙が止まらない。

く 罰

バシッ！バシッ！

部屋の中に響くのは殴られる音だけ。

僕は何も悪い事をしてないのに、どうしてお母さんは何度も僕を叩くの？

バシッ！

ねえ、どうして？お母さん！

「はあ…はあ…あんたなんて生まれなければよかったんだ！」

実のお母さんから聞いたその言葉は、僕にとって余りにも残酷すぎて。

何度も振り上げられ、振り下ろされる掌。

痛い、痛いよ、お母さん。

「ごめんなさい…」

どんなに謝っても届かないんだよね。

うん、僕いつも良い子でいるよ。だから何も言わないね。逆らったりもしないよ。

だからちゃんと僕を見て、叩かずに僕を見て！

\*



「貴方が、誠司くん？」

僕の7歳の誕生日の日。毎年誕生日に行くレストランに僕の知らないおばさんがいた。

僕は言葉が喋れない。喋ってはいけないんだ。だから僕はコクンと頷いた。

「誠司は言葉が喋れなくてね。まあ、色々あってさ。」

慌てて父さんが付け足す。

そうだよお父さん、僕は喋っちゃ駄目なんだ。喋ったら全部がきつとひっくり返ってしまうから。『嫌い、黙れ』って言われて、全部なくなっちゃうから。

それから父さんと知らないおばさんは色々とお互いのことを話し始めた。

今日は僕の誕生日。なのに二人とも僕がいないかのように会話を進める。

父さん、分かったよ。僕は今いないことにすればいいんだね。

僕、良い子でいるよ。だから僕を。

それから何日か後に知らないおばさんは僕の新しいお母さんになった。

父さんは新しいお母さんのことしか見えていないのか、僕をあまり構わなくなった。

それどころか新しい母さんにも僕より年上の子供がいて、その子ばかり可愛がつている。  
痛い思いはしなくていい、けどこんなの僕が望んでいた事じゃない。  
良い子にしてても駄目だった。僕はどうしたらいいの？

\*

「おい、誠司。こっちきてキャッチボールやらないか？」

僕が与えてもらえないものを与えてもらっている、僕に新しく出来たお兄ちゃん。

羨ましい。羨ましい。

僕が与えてもらえないものを、与えてもらって、満足そうな顔して何も知らないくせに僕を遊びになんか誘って！

僕はお兄ちゃんが大好きだ。

僕が好きなものを奪って、僕が手に入れられないものを手に入れて。

僕はそれでも良い子でいる。

いつか誰かが僕をちゃんと見てくれる、そう思った。

でも僕は、そう願っているのが僕だけではないことを知ってしまった。

ある日、夜中にお兄ちゃんの部屋から聞こえてきた泣き声。

「僕……ら……だ……」

僕八、イラナインダ…

途切れ途切れだけど確かに聞こえた。

あれだけ与えてもらっている人が何で？どうして？

僕にはよく分からない。だけど、これだけは分かった。

お兄ちゃんも僕と一緒になんだって。

でも、お兄ちゃんは僕が考えていたよりもっと重い何かを抱え込んでいたのかもしれない。

家族と楽しそうに話した後にふと見せる疲れきった表情。

夜遅く部屋から聞こえてくる溜息と泣き声。

けれどお兄ちゃんは僕という時だけは本当に楽しそうだった。僕と遊んだ後だけは暗い表情もみせない。

僕がお兄ちゃんを支えているのかもしれない。

あの日の出来事は、そう思い初めて間もない頃だった。

お兄ちゃんの部屋のドアが開いた音で、僕は夜中に目を覚ました。ゆっくりとお兄ちゃんは階段を下りてゆく。

嫌な予感がして、僕はお兄ちゃんの後をそっとつけた。

向った先は台所。

お兄ちゃんはずっと何かを見詰めていた。

暗闇の中、窓から入ってくる月の光に照らされて鈍く輝くのは包丁だった。

包丁を握り、空を見詰めて寂しそうな笑みを浮かべて……。

「お兄ちゃん、死んじゃうの？」

自分でも忘れていた‘言葉’が口から零れた。全てがひっくり返ってしまふから喋らないようにしていた‘言葉’が、お兄ちゃんを止めたくて、口から出てしまった。

僕の言葉を聞いてお兄ちゃんは肩をビクツと震わせた。

「お兄ちゃん、死んじゃうの？」

長い間喋らなかった言葉。僕は何を言えいいか分からなかった。だから、一番最初に発した言葉を自分でも確かめるように2度繰り返した。

そしてもう一度。

「お兄ちゃん、死」

「うわああああ！！」

鈍い音がして、お兄ちゃんのお腹から赤い絵の具が溢れる。絵の具は見る見る広がって床を赤く染めた。

僕は思った。きっとこれは悪い夢なんだと。

僕は寝ぼけてるんだ。早く部屋に戻らないと。

翌朝、お母さんとお父さんが下で騒いでいるのが聞こえた。

階段を下りて声のする方へ行くと、お兄ちゃんが台所の床に倒れていた。

ああ、あれは現実だったんだと……きつと僕が言葉を喋ったからいけなかったんだ。

だから何もいえない。

それにお父さんとお母さんは僕が言うまでもなく分かっていた。

「自分で自分を殺した」のだと。

床に寝転がり冷たくなったお兄ちゃんを見て僕は何故か笑顔になった。

お兄ちゃんは必ず帰ってきてくれる気がして　　。

\*

「お兄ちゃん、目が覚めたって。よかったな、誠司。」

お父さんから入院しているお兄ちゃんの目が覚めたと聞いて、僕は嬉しくなった。

やっぱり帰ってきてくれた。早く会いたくて仕方なかった。

家族でお兄ちゃんのお見舞いに行った。

でも、あんなにお兄ちゃんに会いたいと思っていたのに、お兄ちゃんのいる病室に近づいていくにつれて複雑な気持ちになってきた。

あの日の夜のお兄ちゃんの姿を思い出すと胸が苦しくなる。

お父さんの背中に隠れて病室に入り、お父さんの背中の影からお兄ちゃんの様子を見る。

お兄ちゃんと目が合った。

お兄ちゃんは何故か僕の顔を見るなり苦しそうに口を押さえ、下を向いてしまった。

僕はどうする事も出来ないし、どうしていいかわからない。

「ちよつと、昇竜！大丈夫？昇竜！！」

お父さんとお母さんが必死にお兄ちゃんの名前を呼んでいる。

僕にはそれすらも出来ない。

だからせめて僕に出来る事をする。

早く帰ってきてね、お兄ちゃん

僕は微笑んで、お父さんと一緒に病室を後にした。

家に帰ってから僕はお兄ちゃんが心配で、どうしてあんな事をしたのか原因を知りたくなった。

気になって、気になって、お兄ちゃんの部屋に入れば何か分かるんじゃないかと思って、お父さんがお風呂に入ってる隙に僕はお兄ちゃんの部屋に入ってみた。

お兄ちゃんの部屋は難しそうな教科書でいっぱいだった。

コトン…

僕が一步踏み出すと、本棚から本が落ちた。

僕はその本を棚に戻そうと拾い上げた。僕はてっきりそれが教科書だろうと思ったけど違っていた。

それは小さなノート。表紙には何も書いてない。

中を開くと日付と短い文章。

半分は白紙。けど最後のページに「さようなら」の一言。

僕は見てはいけないものを見た気がして慌ててそれを棚に戻した。

ゝ罪、その少し前ゝ

小学校に入学した年、僕は父から小さなノートを買った。

「ほら、お前も小学校に入ったんだし字の練習だと思って毎日日記をつけてごらんよ。」

父さんはそう言って僕に日記を手渡し、僕の頭を撫でた。

「あ、それとだ。くれぐれも三日坊主になるんじゃないぞ？」

あの日から日記をつけることが僕の日課になった。

例えば宿題はサボっても、日記だけは欠かさずつけた。亡くなってしまったお父さんとの約束だから。毎日欠かさず三日坊主にならないように。

それに日記は意外と楽しい。楽しい事を書けば日記を読み返したときに思い出せるし、たとえ悲しいことや辛い事を書くとしても、  
書く、という行為だけでも少しは気晴らしになる。

ただ…最近の日記は楽しい事なんて無いに等しい。

僕は母さんの幸せを願ってた筈だ。なのに、母さんが新しい父さんと再婚してから僕の居場所がなくなったように感じる。母さんの幸せで、僕の居場所がなくなってもそれは本望のはずだ。なのに、僕は、僕は。



月 日

今日は高校の大学入試模擬テストがあった。分からない問題が多くて、きつと結果は悪いと思う。まだ高校1年生だし、落ち込む必要は無いと思うけど、僕は早く自立してこの家から出て行きたい。

月 日

学校で二者面談のプリントが渡された。母さんと父さんに見せないと。だけど2人の間には入りづらい。子供のことなんてまるで見えてないみたいだ。どうしよう。

月 日

土曜日。特にすることもなく一日が終わろうとしている。父さんと母さんは二人でどこかに出掛けたまま帰ってこない。僕と誠司で家で留守番。誠司は自分の部屋で遊んでいるみたいだ。誠司は何も思わないのだろうか。こんなに親を恋しがる僕はどうかしているのだろうか。僕は母さんの幸せを願ってきたはずなのに、最近分からない。

月 日

日曜日。母さんと父さんは今日の夜になってやっと帰ってきた。僕と弟の事なんかどうでもいいみたいだ。今日も僕が夕飯を作るはめになった。僕と弟の二人分。両親は僕たちのことなんて忘れてしまったのだろうか。

月 日

最近とは色々と納得できない。優しくかった昔の母は居ない気がする。再婚する前の方がきつと楽しい毎日だった。いや、再婚してからすくも楽しい生活だった。父も母もとても優しくかった。やっぱり家族は全員揃ってないと、とあの頃はそう思っていた。でも今は違う。

再婚なんてしない方が良かった。これが母の幸せならと諦めるべきなのかもしれないけど、僕の事も少しは考えて欲しい。

月 日

誠司が時々寂しそうな表情を見せる。誠司も僕と同じようなことを考えているのかもしれない。でも、誠司はいいじゃないか。小さいから、僕よりはかまってもらっている。ほんの少しだけど。でも誠司も寂しい思いをしてるならせつかく兄弟になったのだし、支えてあげよう。

月 日

今日は三者面談、母が来た。僕の成績は中間くらい。良い方でもないし、悪くもない。家に帰ってきてから母に怒られた。余計なことに時間を割くような真似をしないで頂戴、と。息子のこと「余計なことなのだろうか？

月 日

きっと両親は息子達なんてどうでもいいと思っている。むしろ邪魔なのかもしれない。僕や誠司の事をどう思っているのか確かめたい。でもどうやって？

月 日

今の状況が全部夢ならいいと思う。そう、これは幸せだったあの頃に見ている悪い夢だと。でも、そんな筈ない。愚痴ばかりを書き綴ったこの日記がそれを明確に表している。でも願わずにはいられない。

月 日

良い方法を思いついた。自殺をしよう。正確には自殺未遂。これで親が僕達をどう思っているのか分かる。いや、このまま死んでしま

っても良い。この日記が両親に見つかれば、そしてこの日記を読めば誠司の待遇はよくなるだろう。もう、僕はどつでもいいや。どちらに転んでも…うん、いいや。

白紙

さよなら……

## ゝ罪と罰ゝ

ようやくお兄ちゃんが帰ってきた。

でも、お兄ちゃんの様子はどこか変だった。僕の知らない人が其処にいるみたいで…。

僕を睨み、口を聞こうともしないお兄ちゃん。

せつかく作ったハンバーグも具合が良くないという理由で食べてくれなかった。

帰ってきたことが凄く嬉しくて、お兄ちゃんの為に作ったのに。

お父さんとお母さんは、お兄ちゃんに対して前よりは優しくなった。でも、その態度もどこかよそよそしい。病人だから優しくしてる感じがする。僕にも優しくなっただけ…でも、何かが違う。

それに、お兄ちゃんが入院している時に夜中に目が覚めて一階へ行くと思間に電気がついてたことがあった。消し忘れかなと思って覗いていて見るとお母さんが泣いていた。その横でお父さんが何かを言っている。ああ、お母さんもお父さんもお兄ちゃんの事が心配で泣いているんだな、と僕は思い立ち去ろうとしたその時だった。

「何で！どうしてよ！？どうしてあの子の為に私たち2人の時間を割かれなきゃなの！？」

あまりの大声にビクツとなって僕はその場から動けなくなった。更にお母さんは金切り声で続けた。

「こんな事なら、子供なんていなければ！」

「しっ、2階にいる子供達に聞こえたらどうするんだ！？」

もう聞こえてるよ、お父さん…。

やっぱり僕たちは、'いらない子'。僕の本当のお母さんが言った言葉とよく似てる。『あんたなんて生まれなければよかったんだ!』って。言ってることは違うけど、きつと意味は同じ。

僕とお兄ちゃんは今全く同じ状況にいるんだ。だけとお兄ちゃんと僕は何か仲が悪くなってしまった。こういう時だからこそ、お兄ちゃんと一緒に居たいのに……。

僕は喋れない。声は出せるけど、その先どうしたらよいか分からない。

「ごめんなさい」の一言も、僕は何か悪い事をしたわけじゃないのに言うのは変な気がした。言葉を喋るのもまだ抵抗がある。現に、家族の間には深い亀裂が入ってしまった。僕が喋ったせいなのかもしれない。

言葉を使わずにお兄ちゃんと仲良くする方法……そうだ、良い事を思いついた!

次の日、僕は思いついた「良い事」を実行した。

用意したの紙とクレヨン。これに僕とお兄ちゃんが仲良く遊んでいる絵を描いて、お兄ちゃんに渡そう。きつと僕の気持ちをお兄ちゃんには分かってくれるはずだから……。

僕は描いた絵をお兄ちゃんが退院した日に渡そうと思っていた。出来れば昼間のうちに渡したかったけどタイミングを逃してしまった。お兄ちゃんは部屋から出てこない、きつと渡すのは明日になってしまうだろう。

僕は明日が来るのが待ち遠しくて早く寝てしまった。

キイイイ……

部屋の戸が開く音で目が覚めた。もう朝が来たのかと思ったけれどまだ夜中だった。

開いたのはお兄ちゃんの部屋の戸だった。あの日と同じような時間

……僕は焦った。

お兄ちゃんはまた自殺しようとしているのかもしれない。不安な気持ちで胸がいつぱいになる。

僕は描いた絵を持ってお兄ちゃんの後を追った。この絵を見たらお兄ちゃんは止まってくれるかもしれない。そう思ったからだ。

あの日と同じように、お兄ちゃんは台所に立っていた。

「誠司も水飲みに来たのか？」

僕の気配に気付いたのか、お兄ちゃんは僕に背を向けたまま僕に聞いた。

お兄ちゃんがこちらを振り向いたので、こくと頷いた。

ああ、お兄ちゃんは自殺なんかしなくなっただ。僕のことを気遣ってくれる今まで通りの優しいお兄ちゃんに戻っただ。

「お兄ちゃん……」

自分でも知らないうちにお兄ちゃんを呼んでいた。お兄ちゃんがゆつくりとこちらを振り向く。

そうだ、せつかくだから描いた絵を今渡してしまおう。後ろで隠し持っていた絵をお兄ちゃんの方に向けて

「うわああああ！」

気がついた時には、僕のお腹に冷たくて尖ったものが刺さっていた。  
僕のお腹からは真っ赤な絵の具、あの日のお兄ちゃんとお揃いで…  
…。  
体が思うように動かない。でも、僕は精一杯手を伸ばして持っていたものをお兄ちゃんに渡した。

ここは緑の草原。

どこまでも続く緑色。

僕はそこで楽しく過ごしている。

ここには何も無いけど僕はそれで満足だ。

だってお兄ちゃんがいてくれるんだから。

お父さんもお母さんもないけど、僕は寂しくない。

お兄ちゃんがいてくれればそれでいい。

お兄ちゃんと2人で毎日笑って過ごして、とても楽しくて。

この青い空の下でいつまでも楽しく過ごすんだ。

そう、青い空の下で

まるで絵に描いたような青い空の下で……

## ゝ断罪と樂園ゝ

「おやおや、2人とも亡くなってしまったようですねえ。いや、私にはどうでも良い事ですが。」

どこまでも続く真っ白な空間で、黒ずくめの男は薄笑いを浮かべながら独奏を始めた。真っ白な空間に、黒い男……その姿は白紙の上の汚点のようで余計に気持ち悪い。

よく見ると男の周りには白い発光体がくると飛び回っている。この男は俗に言う死神、だったら周りを飛び回っているものといえは魂以外に何があるのか？

白く光り、形を持たない魂……それこそが男が言っていた無垢な魂。この世全ての柵から解放され、穢れが無く美しい状態。

男は二つの白い光の玉を手に乗せて満足そうに声を出して笑った。

「私は誰が殺したなんて言っていない。無垢な魂はいいものですねあ、私がどんな介入をしたとしても後で文句を言われなくて済む。私はただ、一度取りそこなった魂を回収したかっただけなのに、思いがけずもう一つ回収できる魂が増えるとは……くっくっくっ、笑いが止まりませんなあ。」

暫くの間笑っていた男であったが、突然笑いのをやめ、上を見上げた。

「まあ、でもこれも一つのハッピーエンドかもしれないねえ。最期の瞬間に分かり合えたかもしれない、これで兄弟は硬い絆で結ばれる……しかし何という皮肉、二人は離れ離れになってしまうのですから。」



男は片方の魂を上へ飛ばし、もう片方の魂を下へ飛ばした。  
男の頭上にはいつの間にか青空が広がり、魂は上へ上へと昇ってゆく。男の足元にはどこまでも続く深く暗い奈落が広がり、魂は翼を失くした鳥のように真逆さま下へ堕ちてゆく。

「聞いたことはありませんか？『自殺は大罪』だってこと。」

奈落の底に向かい男が呼びかける、と同時に青空も奈落も姿を消した。

真っ白い空間に、今度こそ男は一人になった。

「くくく……どうだっていいんですけどね、天国に昇ろうが地獄に堕ちようが。2人とも天国に送ったっていいんです。でもそれじゃあつまらない。『他人ひとの不幸は蜜の味』とはよく言ったものです。この仕事は人の不幸を見られるから辞められない……くつくくく。おや、これはこれはそういう展開になりましたか。くくく、今回は本当に甘い蜜の味ですねえ。」

\*

兄の昇竜は手にした包丁で腹部を突いて、死んでいた。

弟の誠司は手に絵を握って腹部から血を流し、死んでいた。

絵には緑の草原の青空の下、楽しそうに遊ぶ兄と弟。

2人の死体を前にして両親はただ呆然と立ちすくむしかなかった。声が出ない。何を言えいいのか、どんなリアクションをすればいいのか。

それでも母はすぐに気が付いた。「これは望んでいた事なのだ」と。遅れて父も気が付き、2人で顔を見合わせ、そして笑った。腹の底から、可笑しくてたまらないという感じで。

「あはははは！これで誰にも邪魔されない！邪魔な息子がなくなつた！嬉しい、嬉しいわ貴方！」

「僕もだ、僕もだよ。言葉を喋らない薄気味悪い息子とおさらばできるなんて！」

再婚相手を愛し、子供のことを疎かにしてしまった両親。  
親の愛情に飢え、同じ立場、境遇に置かれながらも分かり合えなかつた義兄弟。

すれ違いはすれ違つたまま決して交わる事はないのだろう。

「くく、楽しませていただきました。子供を捨ててまで愛を貫き通す夫婦：是非この手で引き裂いてみたいものですなあ。」

どこかで例の男が笑った。

## ゝ断罪と樂園ゝ（後書き）

はい、完結いたしました。歪んだ愛シリーズ第2段でございます。  
私を書くとしてもこうなってしまうて。

夏ホラーの企画に初めて参加させていただきました。ホラーじゃないとかそういうツツコミは無しでお願いします。

感想、評価、よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6276e/>

---

そして僕は二度死んだ

2010年10月28日03時21分発行